

## 令和2年度第1回清瀬市総合教育会議

令和2年度第1回清瀬市総合教育会議が令和3年2月18日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- 1 日 時 令和3年2月18日（木）午後3時から
- 2 場 所 清瀬市役所本庁舎 市長公室
- 3 出 席 者 渋谷 金太郎（清瀬市長）  
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）  
宮川 保之（教育長職務代理者）  
粕谷 衛（教育委員）  
兵頭 扶美枝（教育委員）  
土屋 佳子（教育委員）
- 4 事 務 局 今村 広司（企画部長）  
渡辺 研二（教育部長）  
戸野 慎吾（企画課長）  
細山 克昭（教育総務課長）
- 5 書 記 島崎 節子（教育総務課）

## 議事日程

### 1. 開会

### 2. 協議事項

「令和3年4月1日 組織改正等に伴う事務分掌について」

「清瀬を誇りとし持続発展の主体者となる力を育むために」

その他

### 3. 閉会

開会

渋谷市長が開会を宣言

(渋谷市長)

本日は貴重な機会となります。清瀬市の教育を熱き教育にしていきましょう。

今日の協議事項は 2 本ございます。1 つ目は令和 3 年 4 月 1 日組織改正等に伴う事務分掌に関する協議です。内容は後ほど事務局から説明させますが、子ども家庭部で行われている事務を教育委員会へ委任いたします。そして、教育委員会で行われている事務を企画部と総務部へ補助執行させるという形です。

2 つ目は「清瀬を誇りとし持続発展の主体者となる力を育むために」をテーマに話し合いを行います。第 2 次清瀬市教育総合計画マスタープランには、日本の良さ、清瀬の魅力を理解し、内外に向けて発信する力の育成を掲げるとともに、市の長期総合計画においては、持続可能な開発 SDG s 達成に向けた取組を推進しているところです。

本日のテーマを議論するに当たり、委員の皆さまの専門的な立場、見地から忌憚のないご意見を頂戴して議論をしてまいりたいと思いますので、よろしくお願いをします。

さて、これから先は教育長、よろしくお願います。

(坂田教育長)

では、司会進行を務めさせていただきます。

まず、協議事項の 1 つ目でございます。今、市長からお話があったように、令和 3 年の 4 月 1 日に組織改正が行われまして、教育委員会から郷土博物館が市長部局に移されます。

また、市長部局から、子ども家庭部関係の事業がこちらに補助執行されるというところでご意見を賜りたいと思います。

では、説明については教育総務課長からお願いできますか。

(細山教育総務課長)

それでは、A 4 縦資料をご覧ください。今回の 4 月 1 日に組織改正を予定しております。それに伴う協議でございます。

まず 1 つ目です。こちらは地方自治法 180 条の 2 という規定に基づき、市長部局から教育委員会への事務を委任するものでございます。市長部局の規則を規定しその中で定義をいたします。

具体的に申し上げますと、子育て支援課学童クラブ係と児童センターの児童青少年係を、生涯

学習スポーツ課児童青少年係に事務委任をするものでございます。

こちらについてのメリットとしては、今現在の学童クラブを小学校と一体的に子どもたちを育むというところと、児童センターにつきましても、教育委員会の事務を一体的に捉えるという考えに基づいております。

続きまして、生涯学習スポーツ課の掌握事務、生涯学習センター維持管理業務を、企画部男女共同参画センターへ補助執行をするものです。

もう一点は、教育部教育総務課施設系の掌握事務、学校施設の整備及び営繕に関する業務、これを令和3年4月1日に新たに設置となります総務部建築管財課へ補助執行をするものです。

必要な手続きは、明日の教育委員会定例会にて上程予定でございます。こちらは規則改正になります。

この2点につきましては地方自治法180条の7に基づき、教育委員会は市長との協議を必要とするところでございます。

ここで、委任と補助執行という言葉がありますが、委任につきましては権限自体を新たなところに持っていくものでございます。一方の補助執行というのは、権限自体は残すのですけれども、その他の事務を新たなところで行うというような手続きになります。

補助執行並びに委任のいずれにつきましても、法律の規定に基づきまして、協議が必要となり、本日この場でご提示させていただいております。説明は以上になります。よろしく申し上げます。

(坂田教育長)

説明を頂きました。質問等があれば教育委員の皆さんいかがでしょうか。

まず、私からですが、細山教育総務課長、郷土博物館が対象となっていない理由を説明してください。

(細山教育総務課長)

また別途、定例教育委員会で議論いただく予定です。

(坂田教育長)

この場では市長と議論をしなくても法規上の問題は生じないですね。

(細山教育総務課長)

はい。

(坂田教育長)

学童クラブと児童センターは教育委員会に委任され、生涯学習センターの維持管理と、学校施設の整備及び営繕に関する業務が市長部局へ補助執行されるということです。このことにつきまして、各委員よりご意見をいただきます。

(細山教育総務課長)

教育長、よろしいですか。

(坂田教育長)

細山教育総務課長。

(細山教育総務課長)

改正に伴うメリットですが、まず1についてです。学童及び児童センター業務が教育委員会に委任されることについては、小学校を核として放課後の子どもの居場所機能の整備をより高い推進力で実現することができること。児童館の児童青少年事業を通して学校と家庭と地域が一体的に子どもたちを育めるような仕組みが推進できると考えております。

次に2点目です。生涯学習センター施設の使用承認等の業務が男女共同参画センターへ補助執行されることについては、これは生涯学習センターが新庁舎に移行されます。アミュービルに残る男女参画センターに補助執行させることが適切であると考えております。

建築管財課への学校施設の整備及び営繕業務の補助執行は、清瀬市規模の自治体では、一級建築士などの専門職を分配配置するより、具体的に言いますと、今現在の施設係なのですが一級建築士を2人抱えております。市全体ではそれ以上の人数がいるんですけども、一つの組織に集約したほうがより効率的で機能的な対応ができるとともに、ノウハウの蓄積や情報の一元化を図ることができ、適切であると考えてございます。

(坂田教育長)

兵頭委員。学童クラブと児童センターが教育委員会の所掌事務となることということについて、メリットの説明がありました。如何でしょうか。

(兵頭委員)

清瀬の場合、多くの学童クラブが小学校の校舎の中に設置されています。学童クラブの所掌は子ども家庭部、学校の所掌は教育委員会となっていることから、垣根のようなものがあつたよう

に思います。これが教育委員会組織の中で管轄となると、これまで以上に子どもを中心に、児童の職員と、学校の教職員等の関わりを密にして養護や教育をすすめていくことになるものとなっていくのではないかと少し期待します。現状から見て、教育委員会が所掌することは非常にいいのではないかと考えます。

(坂田教育長)

ありがとうございます。粕谷委員、児童センターの機能がこちらに移ってくるということについてはどうでしょう。

(粕谷委員)

児童センターの機能も、もちろん一元的に教育委員会が管理するのは好ましいと思います。先ほど兵頭委員がおっしゃっていたことの続きみたいになってしまうのですが、例えば児童も教育委員会の管轄になった場合に、今は児童と学校、要するに学校が終わった後に児童から学校に入る場合はある程度、規制があり、多分子どもたちの移動は自由に出来なかったと思うのです。例えば一元的に管理された場合に、学校での施設の利用という部分では少しハードルが低くなることもあるのか、質問となりましたがよろしいでしょうか。

(坂田教育長)

教育総務課長どうでしょう。ちょっと今までよりはハードルは下がるのではないかと。

(細山教育総務課長)

現状で既に複合化施設という認識になっております。中には学校外の児童クラブもありますが、このような一つのセクションの中で完結できるということは、おっしゃるとおりハードルは下がると考えております。

(粕谷委員)

例えば体育館を使うことが可能になったり、施設を利用できるようにもなりますか。

(坂田教育長)

施設の利用も弾力的に行えるようになるかどうか。

(細山教育総務課長)

施設運用についてですが、今現在学校開放は生涯学習スポーツ課社会教育部門で管理しております。学童クラブ、児童センターがこの課の中に入ってくるということであれば、やはりより柔軟な対応ができるというふうに考えております。

(坂田教育長)

粕谷委員、よろしいですか。

(粕谷委員)

ありがとうございます。

(坂田教育長)

土屋委員。児童センターは義務教育段階の子どもたちの、もっと勉強したい、もっとできるようになりたいという願いを叶えられるような機能を持っていると思うのですが、それが教育委員会に移管されることについてどう思われますか。

(土屋委員)

この組織改正による移管は本当に喜ばしい、教育と福祉は私の専門でありとてもうれしいことだと思っています。今までの分断は、本当にもったいなかったというか、それがつながることが非常に子どもたちにとってとにかくいいということが。やはり勉強したい子どもたちを、教育委員会の中で一体化できるということはとてもいいですし、あと、今回コロナのことで、生活と学校というのが実はすごく密接で、子どもにとって学校空間がすごく大事だったということが改めて認識されたというのが感覚的にもあって、生活と教育の連結、連動というのは本当に不可欠で、さらに子どもから見れば生活空間は実は同じで、制度的には違うということで、学童の子たちが学校を使えないから保健室に行けないとか、いろんなことがきっと今まではあったんですけれども、それが子どもの目から見たら同じ空間というところで、同じところが所管するというのはすごく効率的で、そういう点でも、とてもいいなというふうに思っています。

(坂田教育長)

主語を子どもにおいて一番いい判断であろうということですね。

(土屋委員)

はい。そうです。

(坂田教育長)

宮川職務代理。教育委員会から市長部局に移管される生涯学習センター機能と維持管理についてです。例えば学校施設の整備というものは今まで単独で教育委員会に営繕部門があったのですが、それが市長部局と一体化されていくと。そこも含めてご意見を下さい。

(宮川職務代理者)

まず、財政効率の面から言えば、これが望ましいだろうと私も考えます。補助執行ですので、教育委員会の事務としても、責任を持って関係部局と協議を重ねていく必要があります。逆に意見を交わす機会が増え、市の職員の皆さん方の仕事に対するやる気とか、それから責任感というものをもっと醸成するような形になるのかなということを期待します。

どちらかという、やっぱり財政運営上の効率化ということは必要だと思いますので、それについてはよろしいと思います。

また、いろいろと仕事をしていく中で、やはりつまづくこともあると思うのです。それはやっぱり協働して乗り越えていかなくてはならないことと考えます。そういうことがまた新しい市の職員の皆さん方の仕事とか、それからこの町をどうしていくかということにつながっていくと思います。

(坂田教育長)

学童クラブと児童センターが入ってきます。このことについてのご意見もお願いします。

(宮川職務代理者)

これも私は望ましいのではないかと考えています。学童クラブの職員の皆さんの中には、例えば保育士資格とか教員資格を持っていらっしゃる方もいると思います。それから、兵頭委員もおっしゃられたように、学校の中の施設の一部なのですが、そこに壁はないのかということもいつも思っています。

われわれは学校の先生方の授業をつぶさに見て、いろいろとあれこれ言いますが、学童クラブの職員の皆さん方も、われわれと一緒に子どもたちの学校教育以外の部分でのさまざまな支援とか指導のことを学び合っていくことができればと思います。そして学校の先生方と学童クラブの職員の皆さんの間での意思疎通を図っていくという点でも、教育委員会として仕事をさせていただく方が効率的だと思います。

児童センターも同じです土屋委員がおっしゃられたように、感染症対策や災害対応などのいろ



いろいろな社会事情の中で、やはりもっと連携したほうがいいなというのが見えてきていますので、これもよろしいことと思います。

ついでに申し上げますと、教育委員会は学校地域教育推進本部の事業をもう少ししっかりした事業にしていくためには、やはり青少年の育成に関する部署や部門との連携強化というのはやっぱり必定だろうと思います。このことも教育委員会として仕事をさせていただくことが、より効率的、効果的かなと思います。

(坂田教育長)

ありがとうございます。

われわれも学童クラブと児童センターが来ることによって、一体化して子どもたちを見ていくことができる。

われわれの学習プログラムと外の教育、これも分離していた。そこがまた一体化できていくということで、子どもを主語にすると、とてもいい制度改正だとわれわれは考えています。

市長のご意見をいただければうれしいです。

(渋谷市長)

さっき土屋さんが、子どもたちの生活空間、特別に一日の中で学校が単独に存在しているんじゃない。24 時間、学校の中が子ども人生なのだということからすれば、そういうふうにいるいろんな、変な縦割りは取っ払ったほうが、大人の先生たち職員たちのチームワークもしっかりいけば、親たちとのチームワークもしっかりいけば、子どもは常に大人を見ている。大人の背中を見てるんだ。背中というのは本当の姿。子どもは分かっちゃうんだよ。気持ちが大人もばらばらだと、冷めた目になってしまうんだよな。それがちゃんと大人が、背中のチームワークがしっかりしてりゃあ、それだけでもまた子どもを育てる力が出てくると思う。

(坂田教育長)

この組織改正の補助執行と委任は、市長も教育委員会も大賛成というところですから、逆にわれわれが今度はしっかりとこれを機能させなければいけない。責任が増えたということで、ぜひ、もう一回、手綱を引き締めながらやっていきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

私から一点、ぜひ市長部局の方々にもご理解をいただきたいのですが、学校施設の整備についてです。今まで教育委員会の中に営繕部門があり、機動性が非常に高かったんです。学校からぼんんと電話が入ってくると、さっと見に行ってしまうようなことができました。学校は非常にこれに感謝していました。

これが市長部局に移ったことによって、機動力が落ちてくるということが心配です。そういうことがないように、お互いに連携を取りながらやっていければと思っています。よろしく願いします。

「令和3年4月1日 組織改正等に伴う事務分掌について」委員の皆さん、よろしいですか。  
(全員 同意)

(渋谷市長)

効率性を高めたことによって財政的にも楽になるんだろう？

(細山教育総務課長)

はい。

(宮川職務代理者)

今、教育長がおっしゃいましたがやはり学校は子どもたちの身の安全を守るために、例えばガラス窓一枚破れれば、学校の先生方は直ぐに修繕しです。ということで機動性が問われます。その点を考慮していただきたいです。

(坂田教育長)

これからも状況をお互いに総合教育会議で報告をし合いながら、連携を強めていければと思います。

(渋谷市長)

以前は学校のドアが壊れているとか、そういう建物上の問題とか、それを学校ごとに議会に陳情で持ち込んできていた。平成7年、8年、議員になり立ての頃だったかな。だからもうばらばらだったよ。それから比べたら地獄から天国に来ちゃっているようだよ。

(坂田教育長)

われわれももっとより高い目標を目指して頑張りましょう。市長、よろしく申し上げます。

協議事項の2に移らせていただきます。「清瀬を誇りとし、持続発展の主体者となる力を育むために」ということで、これは私のほうで問題提起のパワーポイントを作りましたので、ぜひご覧いただければと思います。

(パワーポイント資料を上映)

(坂田教育長)

清瀬の歴史は、わが国とそして世界を結核から救った歴史でもある、これは非常に尊い歴史だと私は思っています。結論を言うところの清瀬の歴史を子どもたちにもしっかりと学ばせたい。

また、清瀬はわが国のみならず、世界に冠たる技術や文化を輩出する自治体である。代表的なスカイツリー、市長が最近よくおっしゃられている宇宙エレベーター。

文化的代表として石田波郷。また横山園芸さんのエディブルフラワー、クリスマスローズ。

(渋谷市長 大きくなづく)

今、若手の経営者の中ではトップランク。非常に優れた方で、この方は文化財保護審議会の委員でもいらっしゃいます。

気象衛星センターのスーパーコンピューター。そして病院街。これはもう文化であると思っています。清瀬にしかない文化です。

子どもたちの多くは自分が生まれ育った清瀬が、これほどまで尊い自治体であることを十分理解していないのではないかとこのころです。理解をしなければ、誇りや愛情を培うまでには至りません。まずは知ることが必要であろうとわれわれは考えています。

なぜ、清瀬を知り愛する教育が今こそ必要と考えるのか。これからの世の中は国際化がますます進んで、世界中の人と関わりながら生きていく時代。だからこそ、自分は何者なのか。確固たる自分。アイデンティティーという言葉でも置き換えることができるかもしれません。自分はどういうところで生まれて、どういう環境で育ってきたのか。これを知るといことは、これから先どうしても必要になってくる。

もう一点は、これからの世の中は人工知能が人間に代わって仕事をし、判断し、教える時代。これは普段から市長がおっしゃっています。思いやり、優しさ、愛、感動等、人にしか持ち得ない心が一層大切にされる時代であると。だからこそ、自らを取り巻く人と人との関わりの中で生きていく、生かされていることを知り、感謝すること。これはどうしても必要になってくるということです。国語も算数も非常に重要ですが、こういう教育もわれわれは大切にしていかなければいけないと思っています。

そして、何よりも清瀬市のトップである渋谷金太郎市長は、常々、清瀬を誇り高きまちであることを訴えていらっしゃいます。清瀬市の教育委員会ですから、学習指導要領の具現化とともに、教育という窓口から市長の思いを実現していくことが、ミッションであると思っています。

そこで、清瀬市では学校教育を通して、4つの資質や能力を全ての子どもたちに育むこととして今まで取り組んできました。「生きて働く知識・技能」「判断する力・考える力・表現する力」

「生涯学び続ける力・人間性」「故郷清瀬を愛し、持続発展の主体者となる力」を育んでいこうというのが清瀬市教育委員会の考え方です。

子どもたちが故郷清瀬を誇りとし、持続発展の主体者となるためのローカル教育（清瀬学）を充実させる。いくつかの方法のうち、一つは市独自の道徳資料で学ぶということです。清瀬の道徳ということで、ここにいらっしゃる兵頭先生が中心となり開発をしていただいたものです。

（パワーポイント資料参照）くろくわ和尚、あったかいな（ニンジン）、火の花祭り、僕の好きな場所（柳瀬川）、さんさんさん（日本社会事業大学）、カタクリまつりで、お母さんが風邪をひいた（結核研究所）、我がまちを奏でるオーケストラ、オオムラサキの棲む清瀬を目指して、彫刻家澄川喜一、という10のテーマで子どもたちは清瀬を学んでいます。

道徳学習の資料彫刻家澄川喜一の全文ですが、短い文章の中の中からいろいろなことをくみ取って子どもたちは学んでいます。

最初に澄川先生の生い立ちが書かれているのですが、13歳で旧制の岩国工業学校の機械科に入学。ここで錦帯橋に出合っ、そりとむくり魅せられて東京藝術大学を志された。彫刻を学ぶ希望を打ち明けたが、一般の会社に勤めることを望んでいた父は反対されたこと。泣く泣く地元の製紙会社に就職されましたが芸大への思いは捨てきれず、家出を覚悟してやはり東京藝術大学を受験したいと数日間必死に父親を説得。すると、その熱意が伝わって1回だけならいいと、落ちたらまた地元で働けと許しを得る。すると家の仏壇に手を合わせる祖母の姿。聞こえてきた声は「絶対に受からないように」と願っていらっやったと。幸運にも東京藝術大学に進学することが出来たところで終わっています。

（渋谷市長）

これがあの子の作文の感動になっているんだな。

（坂田教育長）

そうです。そうなんですよ。

（渋谷市長）

彼女のパティシエになりたいというのな。

（坂田教育長）

澄川喜一先生の文章には結論は書いていないのです。何を勉強しろということも書いていない。子どもたちはここからいろいろな思いを自身の中に持つわけです。

スライドは澄川先生から学ぶという道徳授業です。こういう授業が小学校と中学校で3分の2ぐらいの学校で取り上げました。校長が朝礼で講話をしたり、もしくは学年だよりに書いたりというような形でやっていたらいいと思います。

子どもたちが持った印象をご紹介します。お父さんとかおばあちゃんとかに反対されても夢を諦めないというのはすごいなと思いました。スカイツリーをデザインした人が清瀬にいると思うとうれしいです。自慢したいと思います。今日の道徳を通して、私はこの清瀬に住んでいることをとても誇らしく思いました。私も一度だけ錦帯橋に行ったことがあります。ここはスカイツリーのアイデアが出たところなのだと思うと、錦帯橋にもスカイツリーにももう一度行きたくなりました。私も努力をすれば澄川さんのようになれると信じて、いつまでも夢を追い掛けたいと思います。これは、パティシエの子です。45分、50分の授業だけでも故郷清瀬について子どもたちは多くを学んでいます。

市長がいつも取り上げられていらっしゃる日本文教出版の教科書、社会科の副読本も活用し社会科の学習を通して学んでいます。今、全ての教室に置いてあります。

大林組の見学、これも故郷清瀬を学んでいます。音楽から学ぶことも。スライドの写真は「清瀬賛歌」を練習している姿です。「武蔵野の面影のこす赤松の森を歩けば」いつも市長が歌われている歌ですね。

区や市にはそれぞれ自分の自治体の歌がありますが、清瀬には清瀬賛歌があります。清瀬第七小学校では4年生と5年生はこの歌の練習を始めました。まずは歌詞を覚えてという段階です。清瀬第七小学校創立50周年記念式典で歌うため練習を始めたということです。

(渋谷市長)

清瀬小児病院跡地の東京都の式典に歌ってもらおうかな。

(坂田教育長)

市長、清瀬市内の小中学校では清瀬賛歌を歌えます。ただ今、コロナウイルス感染症の関係がありますので。

(渋谷市長)

ああ、そうか。

(坂田教育長)

社会教育の窓口から主体的にも学んでいます。調べ学習の発表では第1位はひまわり畑、私の

体験主張発表会学習発表の部で1等賞をとりました。

清瀬第四中学校の生徒たちは、定期的に空堀川の清掃をしています。非常に地域のことを考えて、地域を支えていく一員になりたいという願いを持ってやっているわけです。

清瀬第五中学校の子どもたちは農業体験です。このような体験ができる子どもは、なかなか都内にはいません。

清瀬第八小学校ではひまわりの種まき体験を行っています。清明小学校4年生全員、歴史と伝統から学びとして下宿囃子を行っています。ひょっとこを踊る児童がいきいきとしています。

(渋谷市長)

まさかマスタトキジロウさんの孫ということじゃないよね。

(坂田教育長)

お孫さんかもしれません。清明小学校の下宿囃子はまさにSDGsという教育活動の一環です。もう一つが、博物館で学ぶということです。子どもたちが博物館に来て発掘体験をします。これは学校支援本部を通して地域の人々から学んでいる姿です。

清瀬の子どもたちは、確かに育っていると思っています。学力面では課題はありますけれども、人として成長していると確信を持って言えます。さまざまな場面で子どもたちが活躍して、地域の人たち、大人を元気にしてくれていると私は思っています。

今日、市長とぜひ共に、より一層清瀬を知って、愛して、誇りとして背負って立つ子どもたちを育てるにはどうしたらいいだろうかを考える時間になりたいと希望しています。教育委員会だけでなく、市長部局と一緒にわれわれは取り組んでいきたいと願っています。そういう機会にできればというふうに、問題提起をさせていただきます。

これが議論のテーマです。ぜひ、これはローカル教育の清瀬学の必要性、清瀬学でどういふものを取り上げるべきなのか、市長のご感想を伺いたいと思います。

論点3です。清瀬学の充実を図るための方策として何があるでしょうか。清瀬学とともに育むべき母校愛とは、富士見幼稚園のタンポポ魂から学ぶということですか。やっぱり清瀬を好きになるよりも、まず学校を好きになるとか、母校愛、園を愛する気持ちが基本になってくるのではないのでしょうか。

市長のご了解がいただければ、市長講話を新規採用教員研修時に行うことなども含め、今日は議論できればと思っています。よろしくお願いします。

まず市長からご意見を頂戴したいと思うのですが、今、問題提起のこのパワーポイントをご覧になっていただいて、ご感想ご意見をお伺いします。

(渋谷市長)

いい形で、また一歩進んで、まとめてくれてありがとう。

誇りというのは、うぬぼれとか、そういうことでは全くない。私の人生体験だけれども、小学校5年生のときに医者から「心臓が悪くて二十歳までに死ぬ」と聞かされた。それ以来、遊んでいる時間はない。常に勉強をしていなきゃ駄目だって思わされていた。結局19歳になり東大に行けなかったことで自信を無くしたし、早稲田大学生の時には、生きる資格はない自分には価値がないと思うほどになってしまった。駅のホームから飛びこめば楽になると思いながら駅に立っていた。死んじゃったらおやじやおふくろが悲しむとそれだけが行動を抑えていた。

学校時代、高校から一緒だった知人と話をしたとき、「お前は悩むことを趣味にしているな」と言われて、はっと気が付いたのが、親鸞聖人の「善人なおもって往生を遂ぐいわんや悪人をや」の「善人」「悪人」の意味に気が付いた。

悪人は法律を犯しているわけじゃなくて、不器用にぶつかりながら生きている煩惱凡夫の人間のことで、神様仏様は不器用に前に進んで生きている人間を見守ってくれている。だから自分はこのままでいいんだと自己肯定感が生まれた。

それからものすごく楽になった。それまで生きる価値なんかないと自分に突き詰めていたけれど、その体験を経て肯定感を真ん中で感じることは、それはうぬぼれじゃない。大きな愛に包まれているという思いと一緒にだね。

子どもたちには大きな愛を実感出来るように、園では全ての子どもを抱き上げている。それは自分がいい子だからではなくて、ありのまま、このままで愛されている。それがしっかり伝わるとその子の後々のエネルギーになる。現場体験を幾つもしてきているから、だから清瀬の子どもたちに、そういう肯定感、自分の住んでいるところへの愛、根底を持つことも、これがエネルギーになっていくに違いないと思っている。

(坂田教育長)

ありがとうございます。市長が一人一人の子どもを抱き上げている。子どもたちはこの人だったら安心して頼れると感じているでしょうし、きっと温かく包まれた実感を持っています。それは地域にも言えるのではないかと私は思います。自分の生まれ育った故郷清瀬に抱きしめられているという感覚ですよ。思いやり、優しさ、愛、感動、人にしか持ち得ない心、これは絶対に教育の内容から外してはいけないと今の市長のお話を伺って思いました。

市長のお話、なぜ清瀬学が必要なのかということも含めて、私の問題提起を聞いていただいた上でご意見をお願いします。

(渋谷市長)

本当に清瀬はいい材料がいっぱいだから、ここにいるのは最高に幸せだ。社事大だって昭和21年に原点はつくられている。だから校歌に「孤独、敗残、途(みち)に哭(な)き わが世 餓(がひょう)の野となれば」、飢え死にした死体がごろごろだよ。もう戦後なのだから。「社会の福祉誰(た)が」、誰がやるんだ。われを忘れる、「忘我の愛と智の灯(ともし) 捧げん世紀」、時代が来たと。「社大 社大 おお われら」すごい校歌だよ。そういう校歌を持つ大学が原宿から、清瀬が一番ふさわしいということで移ってきたに違いないと思う。

『フロジャク神父の生涯』という本を読むと、すでに神父は日本の社会事業の先覚者であることが分かる。明治42年辺りにバチカンの指示でフランスから布教のために来日。中野で結核患者と会っている。

昭和の初めの頃は、家族に結核になったからと一家心中をしたケースが300件ぐらいあったという話だった。つまりそれだけ、結核はめちゃくちゃ差別されて、遠ざけられたんだよ。

昭和8年に府立清瀬病院の2年後、フロジャク神父は療養の病院の計画している。

そういう状況の中でフロジャク神父は家族と、困っている人たちをちゃんと面倒を見ていくというか、そういう社会事業をあちこちに立ち上げていったんだよな。だから、日本の社会事業の先覚者だって日本赤十字社の副社長だった人が表現しているわけでしょう。

(坂田教育長)

土屋委員に日本社会事業大学からの代表としてコメントを述べていただきましょう。どうぞ。

(土屋委員)

今、市長が本当に抱きかかえる、育むという話をされた時ドキドキしました。

話がそれてしまうかもしれませんが、実は今、論文を作成しております。それは社会的に様々な困難を抱えた学生が沢山いて、そこで学校がホールドしないとその子たちは地域とも、家庭とも離れてしまう。学校が救っていかなければ駄目だというような論旨で書いています。

それを地域でやれたら良いと思っています。日本社会事業大学もそうですが、執筆中の内容を市長がおっしゃったので、それが地域にあればすごく良くて、現在、家族にも地域にも失われている「ホールドする」、人をちゃんと抱きかかえるという市長のコンセプトが素晴らしいと感じました。

バックボーンを持つ地域は、実は多くないと思います。地域資源をちゃんと掘り起こして、それを市長がちゃんと抱きかかえていくという、一つの愛なのだというのは、これからの時代に本



当にふさわしいなど改めてお話を伺いドキドキしました。

(渋谷市長)

私たちの生活の便利さを追求した結果、地球温暖化が原因して、台風が強くなったり気象被害が多くなる。しかし物理的なことだけじゃなくて人間の心の力で人類生存の方に導くはずだと思っている。

わずかアリののような小さな清瀬かもしれないけれども、でも本物のアリであれば土手でも崩す例え話があるぐらいだから、清瀬のそういう心意気はとても大事だと思う。

(坂田教育長)

その心意気を学校現場で校長として、子どもたちに伝えてこられた兵頭先生。

(兵頭委員)

道徳の資料の中に日本社会事業大学のボランティア活動を書いた「さんさんさん」という資料があります。

ここに出ているものは、その当時、本当にもう5年6年前なのですけれども、それぞれの各学校の道徳の担当者が、清瀬のことを教材にするという機会がありました。自分は何を書こうかという前に、清瀬にどんな資源あるかをみんなで相談しながら編集を行いました。澄川さんの資料ですが、担当者が実際にお話を聞きに伺っていると記憶しています。

道徳の授業の時間は1時間程度ですが、あまりにも中身を書き過ぎないで、書き過ぎないけれども子どもの自分の心にぐっと入ってくるような、そのような文章にということで、いろいろ考えながら作ったものです。

今回澄川さんが文化勲章を受賞されて、この教材は各学校にとってはタイムリーだったと思います。この一文を読めば、澄川さんの進む道は、本当に順調ではなく苦労や挫折もあり、でもヒントみたいなものをもっと若い頃にあって、自分の道、夢を持っていたという、生き方のモデルみたいなものに出会うことができましたと分かります。

子どもたちにとって同じ市内に住んでいるモデルを、間近に感じる事が出来たのではないかと、私はこの資料を作った良かったです。

その他の教材にしても、それぞれが清瀬の良いものだけでなく、そこに関わる人に焦点が当たっています。日本社会事業大学の「さんさんさん」もそうですが、清瀬に住んでいない学生さんが、清瀬の子どもたちのためにボランティアをしているという話なのです。

それで子どもたちは、清瀬の住人でもないのに、私たちのためにボランティアをしてくれてい

る。じゃあ、私たちは清瀬のことをもっと大事にしなきゃ、そのような気持ちが生まれるというような話なのです。

いろいろなモデルを見ながら子どもたちは成長します。そのような意味でも清瀬という舞台が自分の身近なところにあって、その中でいろいろな人が活躍している。そして、自分たちのためにいろいろな生き方を見せてくれている。

先ほど市長が「大きな愛を実感する」とおっしゃいました。これは本当に一番大事なことで、自分の家族はもちろん、それ以外にも多くの方が自分たちを助けてくれたり見守っています。自分のお子さん学校にいないけど、学校支援本部や地域の方が関わって一生懸命も子どもを支えてくれています。様々なモデルに出会うことで、子どもたちは心が育まれるのではないかと思っています。

ここの道徳の資料を書いた後も、これ以外にもいろいろと題材になりそうなものはあると思います。これからも清瀬のいろいろな題材を増やしていきながら、清瀬を学ぶということをきっかけに、子どもたちが心豊かになることを希望しています。

(渋谷市長)

清瀬は不思議だな。場所や人、そこから何かいろいろな力が出てくるのだよ。言葉にもね「きよせ」に、「ひ」を付ければ「ひきよせ」、引き寄せていくんだよ。

(坂田教育長)

「ひ」を付ければ「ひきよせ」、引き寄せる。思いも付かなかったですね。

市長が常々、もう本当に「きよせ」という3つの言葉をお考えになっていらっしゃるということがよく分かります。必ず何かに関連付けながらお話しされ、やっぱりトップはそういうものなのですね。

宮川職務代理者、道徳の教材に、例えばフロジャク神父、ピニロピ医師等のような清瀬の史をつくってきた方々、世界を結核から守る歴史をつくってこられた方々というのも、スポットを当てるべきではないかなと思いますがいかがでしょうか。

(宮川職務代理者)

私と清瀬市の出会いは1978～1979年頃だと思います。私立の教員として勤めていましたが、旧田無市の公立中学校に職を移しました。当時、バスケットボールの顧問として清瀬第二中学校や清瀬第四中学校に試合で訪ねることがありました。その頃から武谷病院というのはすごく気になっていました。

学生時代に朝永振一郎さんの講演を聴く機会があり、ピニロピ先生はその盟友である武谷三男さんのご婦人であると知りました。優れた方々がこの地で活躍されていることを知り、清瀬の良さに引き寄せられました。

そのためにフロッジャック神父やピニロピ先生の人柄とか人間性、宗教とかは全部置いておいて本市独自の道徳教材を作る題材として清瀬で活躍する人をもっと取り上げることも良いと考えます。例えば武谷ピニロピ先生の『悲しみのマリア』という本も、NHK から出されています。読んでみたのですけれども、NHKの朝ドラのシナリオになればいいなと思いました。(渋谷市長 うなづく)

それから自己肯定感ということを市きました。長がおっしゃいました。私は若い頃から自己肯定感について勉強してきました。日本の学校教育はまだまだ子供たちの自己肯定感を高める教育が出来ると思いました。子どもたちの心の力と市長がおっしゃいましたが、これを育てるには、自分が生まれた町のことなど。つまり、自分のルーツを知る。それを誇りとして困難を乗り越えられる。そういうことを目指す教育が必要だと考えます。

今回の読書感想文コンテストで、清瀬の教育が大きく変わってきていると思いました。たくさんの子供たちの論文を熟読し、時間をかけてコメントさせていただきました。実に子供たちは考えている。そして、教育長と「いい読書感想文を書いているね」という話をした時に、家庭の教育をどうしようかという議論になりました。そういう意味で人間の心を育てるということをしていくことが大事かなと思いました。いわゆる知識理解の学力というの必要ですが、それ以上に心を育てない限り自分から学ぼうとしないと思うのです。

結論を申し上げますと、清瀬が取り組んでいるビブリオバトル、赤ちゃんプロジェクト、それから読書感想文コンテストなど、様々な取り組みが子どもたちの心を鍛えていくのと同時に、そのための道徳資料を厚みのあるものにする。大人も読みたくなるようなものを作る。その様なプロジェクトを教育長は仕掛けて実行され得ると思しますので、応援をお願いいたします。

大人になり清瀬から転居をしても、他所で生まれ育ち清瀬に転入して来た人も、この清瀬の町が自分たちのルーツになるように。そうであれば町の財政的な部分も潤っていくと思います。

子ども達または市の皆さんが読んでも「なるほど」という資料にし、作ったものは学校を飛び出して、世代を超えて水平展開していくようなことが出来るように、市長部局の応援していただくことを願っています。

(渋谷市長)

清瀬で生まれた子どもたち。または清瀬に移ってきてくれた子どもたち。清瀬の地とご縁が生まれてありがたいと思う。こんなすごいところに自分は生きている。こういう思いというのは

大切だね。

昨日の坂下さんの感想文を記者会見で読ませてもらったよ。

最後の雑談のところ、人とのつながり明るい社会をつくるというところの部分「このように人との関係を保っていけば、犯罪はこの世から減っていくと思う。ただの他人と思わず、人とつながって過ごすことこそが大切だと思うし、みんな生きるために生まれて、たった一つの大切な命を持っている。犯罪を減らし、最後には犯罪がなくなれば社会は明るくなる。お互いを認め合って大事に思うことが、社会を明るくする第一歩だね。そこから少しずつでも明るくしていく努力をすることが、私たちの使命だね。子どもが大人を変えることもある。

ごみ収集の作業員宛に手紙が添えられていた。40通位手紙があつて担当者から受け取り読みました。こういう文章ですよ。

「世の中全体が新型コロナウイルスの恐怖の中で、いつも私たちが出すごみを収集してくださりありがとうございます。特にプラスチックのごみが多くて心苦しく思っております。まだまだ収束の兆しが見えない中のお仕事、くれぐれもお体に気を付けてくださいませ。感謝でいっぱいです」。市民の人が作業員に渡してくれるなんて最高だよな。

(坂田教育長)

最高ですね。

粕谷委員。市長がちょうど紹介された事、先ほどから紹介されていたフロッジャック神父やピニロピ先生の尊い歴史や地域資源。それらは大人もまだ知らないのではないかと思いますか。先ほど、職務代理者が大人も読めるようなものにしたい、もっともっと広報すべきだというお話をされて、そこは保護者の立場からいってどうですか。

(粕谷委員)

そうですね。先日の教育長からオンライン全員協議会の中で、清瀬に長く住んでいるのだから、清瀬の良いところ正直に言うとなかなか思い浮かびませんでした。それで他の方に聞いてしまいました。本音は意外だと思いますがずっと住んでいると良さは分からない。

(渋谷市長)

「人の世の 流れの果てや 清瀬村」に表れているのかな。昭和6年以降結核療養所の町だからね、徹底した否定感。清瀬は墓場村みたいだった。清瀬は駄目な町と徹底してそう思うようにさせられちゃったんだよ。

医療についてはすごい人が多い。ピニロピ先生やアメリカから来日されたコニネ先生は、日本

のリハビリを育てた人だ。東京リハビリテーション学院の初代の教育部長になられた。がんの痛みの恐怖から救うというのは中島医院の中島先生。シロップ状にしたモルヒネを飲むという治療、イギリスでは始まっていたのを、勉強して日本中に広めたのは中島先生。ホスピス緩和ケア、終末医療でも清瀬はもっと目立っていくはず。

(坂田教育長)

粕谷委員。長く住んでいる方にお伺いしたい。

(粕谷委員)

実際長く住んでいると、分かっているようで分かっていないところがあると思います。もちろん道徳教材を活用して子どもたちに伝えるのは必要ですが、大人も学び直すという意味で、大人も学べるような資料を作っていくのは、すごく意味のあると思います。

一方で、例えば清瀬は緑が多いよねとか、いろいろな伝統文化があると伝えられても、好きになるか。もしかしたらそういうことではないのかなと感じます。

冒頭の市長の話に戻るのですが、人が自分以外の人を大切にする。それが大きな範囲でなくてもいい。おうちの隣の人とか、人が人を大切にできるうちに。

(渋谷市長)

妬まないということだよ。妬む人間は我欲塊。我欲塊は他人の心配をしない。手前に酔いしれて、手前にうぬぼれて生きている。そういうのが一番楽な人生。我欲だけになっていく。

妬みのないそういう地域社会をつくっていくこと、とても大事だ。

(粕谷委員)

一つよろしいですか。

(坂田教育長)

粕谷委員。どうぞ。

(粕谷委員)

清瀬を愛する人間を育てる。それは清瀬で育って他の地域に移っていく人というのも多いのですが、じゃあ将来的にどんな人間を結局清瀬で育てたいのかということなんです。これは何年か前の青年会議所の資料なのですが、久しぶりに読み返してみました。

(渋谷市長)

そうか。

(粕谷委員)

市長はご存じと思いますが、青年会議所では理事長職に就いた人間が、その年の方針（スローガン）を決めます。清瀬で生まれ育ち、青年会議所に所属されて理事長になる方もいれば、他の地域から移ってきて理事長をやられている方もいらっしゃいます。スローガンをご紹介したいのですが。

(渋谷市長)

いいよ。

(粕谷委員)

渋谷市長が理事長時代のスローガンは、「新しい風 ちょっとすてきな生き方 まちづくり」でした。他の方々もまちづくりや郷土愛、清瀬をどうにかしていこうというスローガンがほとんどです。すごく素晴らしいことですよね。清瀬で育った人間が、じゃあ清瀬で暮らして、清瀬にずっと住んで、将来清瀬のために何を還元出来るかと考えられるような人間を、より多く育てられるとことが、教育長の今日の議題の清瀬を愛するわがまちを愛するということなのかなというふうに思います。

(坂田教育長)

この写真をちょっとご覧いただいて。これは、見覚えある方もいるのではないかと思いますけれども、青年会議所の関係の方がようこそ先輩という授業を学校でやっているんです。

(渋谷市長)

やっているのか。よし、よし。

(坂田教育長)

これはわれわれがいう循環型社会です。育てられた人間が今度は子どもを教える。子どもたちが大きくなったら、また今度は下の子どもを教えていくという。こういう姿がいいまちをつくっていくのではないかと、そこでは郷土愛も育まれていくのではないかと。この姿を見て清瀬にはこん

なすごい人たちが沢山いると子どもたちは分かるのです。

市長、この論点1の郷土愛の必要性は共通理解と思います。取り上げるべき学習教材については、例えばフロジャク神父のことを取り上げたらどうだという話。もしくは社事大にもいろいろあるじゃないかというお話。それからピニロピ先生のお話もありました。それからリハビリテーションセンターの学長のお話。中島医院のお話。道徳の教材を開発していきたいと思っています。  
(渋谷市長 大きくなづく)

二つ目が、やはり大人も一緒に学んでいくところだと思うのです。子どもたちから、われわれ大人に対して、どういうことを勉強したか発信をしていく機会「清瀬学交流会」を作る。学校教育の中で、また社会教育と協働しながらやっていきたい。

三つ目が、博物館の活用。まだまだ博物館は学校教育との連携が十分ではありません。今後市長部局に移ったとしても連携をしっかりと取りながらやっていきたい。

四つ目は、母校愛。タンポポ魂の話をたくさんお聞ききしたかったのですが、またこれは次の機会にお願いします。自分の学校をどれだけ愛することが出来るかは、私は清瀬学の一番の根本になると考えています。それぞれの学校に頑張ってください。

最後は、これは市長、ぜひ了解していただけませんか。来年度、若手の教員の新規採用教員に対して、やはり清瀬の魅力を語っていただく機会をお願いしたい。

彼らは東京都からの派遣で清瀬市立学校に勤めるわけです。清瀬のことを知らないで清瀬の学校に勤めてもらったら困りますよね。兵頭先生。

(兵頭委員)

はい。それは知ったほうがいいと思います。

(坂田教育長)

これはぜひ市長部局と調整をしながら実現していきたいと思いますので、よろしく申し上げます。この程度しか今日はまとめられないんですけども、宮川職務代理、ちょっと補足をしてください。

(宮川職務代理者)

やはり聞く、読む、書く、それに計算だと思います。聞くことは親や地域の人から。それで今の青年会議所の皆さんから、子どもたちがたくさん聞いて学んでいる。それから読む。今は読書に力を入れている。書くことは、これから学校でもっと自分を書くということで、自己肯定感を高めていく。そういう教育を考えていくように先生方にお話をしていきたいと思っています。

清瀬市の公立図書館もいろいろと工夫されています。例えば世界の学力トップレベルと言われるフィンランドは、一家庭で数百冊位の文学書があるといわれています。4キロ四方に必ず1つの図書館を配置しています。図書館の利用率の世界トップはフィンランドです。大人も、子どもたちの学力も高いです。計算が出来るという学力ではなくて、いわゆる教養としての力がついていないのでしょうか。清瀬市には図書館が5館あります。そういうことをもっと誇りにすること。市民の皆さんも、学校の先生方も、その学校の先生方も市の職員の皆さんも、それを承知してくれないと困るのです。教育長には、先生方にここ清瀬に愛着が湧かなかつたら東京都に帰れとそれぐらい言っていただきたいです。

(坂田教育長)

市長。われわれも今お話があったように、ここで生まれてよかった誇りに思う。私は清瀬が故郷でよかったと思えるような子どもたちを育てていきたい。もちろん学力も大事です。国語の読む力、漢字の力も大事だし、計算できなければいけない。でもそれ以上に、粕谷委員がおっしゃった、人と人とが互いに関わり合いながら。それで市長がおっしゃった、我欲のない町。人間として誇れるような人間を育てていく教育に頑張っていきたいと思っています。これからも、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

(渋谷市長)

ありがとう。よろしく。

(坂田教育長)

じゃあ事務局にお返ししますけれども。お返ししていいですか。

(細山教育総務課長)

これにて総合教育会議のほうを閉会とさせていただきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。

(全員)

ありがとうございました。

**閉会**

渋谷市長が閉会を宣言



午後 4 時 30 分 閉会